



不妊治療に新しい風を吹き込む「Varinos」桜庭喜行社長に聞いた



Varinos（東京都江東区）は子宮内にどのような細菌がどのくらいの割合で存在するのかを、それぞれの細菌の遺伝子（DNA）を調べることで正確に検査できる技術を持つ。この検査結果は不妊治療に活かせるという。

どのような技術なのか。不妊治療に新しい風を吹き込むVarinosの桜庭喜行社長に技術の内容や事業計画、出口戦略などについてお聞きした。

乳酸菌が多いと、妊娠率、生児獲得率が上昇

ーDNAから細菌の割合を検出する技術とはどのようなものなのでしょうか。

細菌の遺伝子を調べるとDNAの塩基配列が全く同じ部分と、少しだけ違う部分があります。この少しだけ違う部分の量を調べることで、どの細菌がどのくらいの割合で存在するのかが分かります。

まずは子宮内から検査試料を採取し、前処理を行ったうえで細菌の遺伝子を増やし、DNAの塩基配列を高速で読み取る装置にかけます。細菌ごとに塩基配列は分かっていますので、データベースと照らし合わせることで、どういう細菌がどのくらいの割合でいるのかを網羅的に見ることができます。これを子宮内フローラ検査として不妊治療をされている方に提供しています。

ー細菌の割合が分かることで、なぜ不妊治療が可能なのですか。

海外の研究でラクトバチルスという乳酸菌の一種の割合が90%以上のグループとそれ未満の二つのグループを調べたところ、乳酸菌の多いグループが少ないグループより、妊娠率が2倍以上高く、生児獲得率は8倍以上高いことが分かりました。

このため検査の結果、乳酸菌の割合の低い人は、乳酸菌を増やすか、乳酸菌以外の細菌を減らす治療を行えば、妊娠率や生児獲得率が上がるのです。

生児獲得率が上がるというのは流産や早産が減るということです。妊娠率が高まるだけでなく、妊娠期間中ずっと乳酸菌の割合を高く保つことで、流産や早産を減らすことができます。

ーこの技術は他社でも実現できるのですか。

この技術は6年前に我々が世界で初めて実用化したもので、その一年後ぐらいに、スペインの会社が同ような検査を始めています。その後、国内でも何社か似たようなことをしようとした形跡はありますが、未だに実現されていません。

現在、海外では数社が始めようとしていると聞いていますが、本格的に始まっているのは1社ぐらいで

す。現状、我々の検査が感度・精度において世界トップクラスと言えます。

ーこの検査ができる病院は増えているのでしょうか

昨年この検査が先進医療という仕組みに取り入れられ、より使いやすくなったことから、いろんなところから引き合いがきています。特に大学病院は自由診療だと使いづらいようですが、先進医療になったことで、採用していただけたところが増えています。

アジアから海外展開をスタート

ー今後の事業計画をお教え下さい。

国内は先進医療に取り入れられたことで、今後順調に伸びていくと考えています。保険が使えるようになれば、もっと使いやすくなりますので、さらに伸びると見込んでいます。

海外での展開についても準備をしている最中です。まずはアジアなどの近い国から始め、いずれアメリカやヨーロッパにも広げていく計画です。当面は海外のパートナーと提携して検査試料を送ってもらい、検査自体は日本で行う計画です。

ー出口戦略についてはどのようにお考えですか。

いろいろと検討はしていますが、現時点でお話しできることはまだありません。ゲノム（全遺伝情報）の技術を使った新たな検査を開発できる企業が日本になかったため、なんとか日本にそういう技術を持っている企業を根付かせたいと思って、この会社を創業しました。この思いを実現できる方法を探っていきたいと考えています。

ー今年7月に京都大学で実施されたピッチコンテスト「スタートアップワールドカップ」で特別賞を受賞されました。こうしたピッチコンテストをどのように見ておられますか。

スタートアップワールドカップは大変活気があり、驚きました。事業を広く知っていただく、とても良い機会になったと感じています。観戦されていた企業の方から詳しく話を聞きたいとの申し込みもありました。まだ世の中に知られてない企業さんであれば、こうしたコンテストに出ることをお勧めします。

【桜庭喜行氏】2001年、埼玉大学大学院博士後期課程修了 博士（理学）取得2001年、理化学研究所ゲノム科学総合研究センターに所属2008年、米国セントジュード小児病院に所属2011年、GeneTech検査技術部長に就任2014年、イルミナエクゼグティブクリニカルセールススペシャリストに就任2017年、Varinosを設立。代表取締役役に就任

文：M&A Online